庭の身体、あるいは
アートの感じる自然について

新見 隆　キュレーター

昨年、「五感のユートピア」を通して「ヨーロッパ世紀末の芸術家村と神秘主義」をやりましたが、その展開を、日本とモダニズムの関係から捉えなおします。大衆文化とファシズム化の始まりが交差する1933年を横軸に、作家たちの自然観と身体、アートのエニマ（謎）を探ります。

近代における自然と肉体の分断、世界モデルとしての庭の意味

今、聴いていただいている音楽は、ラフマニノフの『ピアノコンチェルト第三番』です。彼がロシアから亡命する前、最初のアメリカ旅行をして、ニューヨークで彼自身の演奏で初演した曲です。『パガニーニの主題による狂詩曲＝ラプソディ』を聞いてもらいますが、今回お話ししたい中心課題が含まれてもいます。

2009 年の「山のシューレ」でお話した、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての芸術家コロニーと作家たちの自然観、モダニズムの潮流などのテーマをさらに、多面的に深めたいと思います。

ひとつは「庭」というトピックです。「山のシューレ」全体が向かう方向性として、来るべき人間と自然を繋ぐ、文化的なキーワードでもあります。庭は中世の室町末期、禅寺で始められた枯山水という形式がまずあります。二十世紀になってイサム・ノグチさんらが新しい庭を考えだした背景にも、この日本の伝統的な庭の概念があった。枯山水はご存知のように、自然そのものではありません。人間が自然を解釈し、自分のなかに取り込もうとしたある種の世界模型としての庭です。

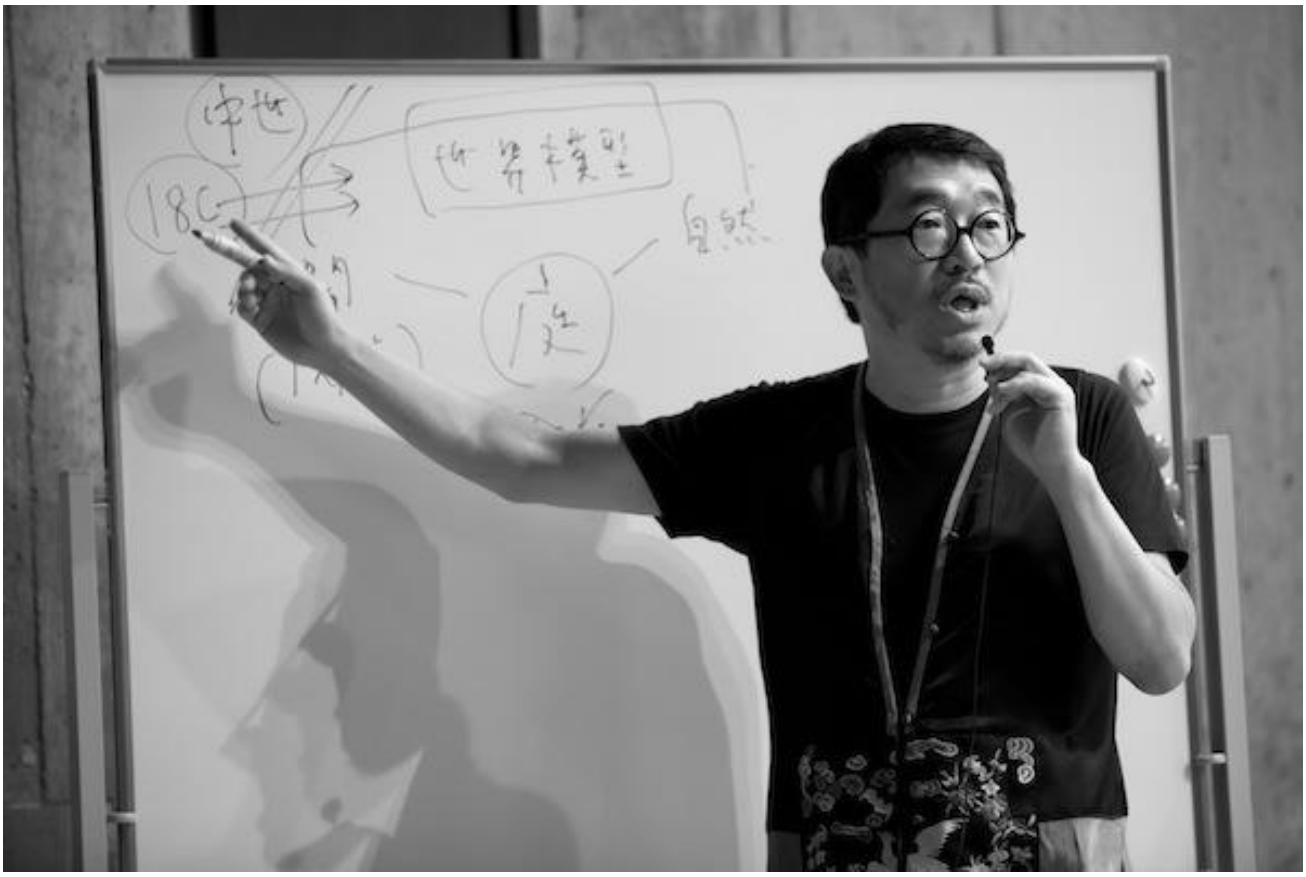
西洋においてはバロックとかロココの時代などには、ベルサイユ宮殿のかっちりした幾何学的な庭園などが知られています。イギリスでは廃墟趣味やら、ゴシック的怪奇趣味、山の中の古城、朽ち果てそうな自然やエキゾチックな景観を好んできた庭の伝統があります。

洋の東西はありますが、近代になって、人間が宇宙世界と分離した、人間の身体が自然と分断されてしまった。そこに出てくるのが「庭」です。中世の時代は、宇宙と社会と王様と民衆と職人のそれぞれの共同体があり、一体化した世界観があった。封建的な社会で、階級がありそれに伴う苦難もあったが、全体的な人間観宇宙観にはまとまりがあった。これは十八世紀までです。

その後、産業革命と市民革命によって十九世紀が始まり、今日の産業消費的な市民社会が始まったが、その時に崩れたものがある。たとえばゲーテやモーツァルトの時代には、人間の日常の小さな感覚、自然に対する思いがそのまま語られているだけで、十分に宇宙的な詩や音楽になっていた。だけど、それが断ち切れた。

偉大なるロマン派として、十九世紀的な音楽を作っていたベートーヴェンが、後期のピアノ曲の始まり『テンペスト』を作ったのが 1802 年。この劇的でドラマティックな音楽に弟子のシントラーが驚いて、「こんな切羽詰まる迫真の音楽を作ったのは、どういう意味か」と問うと、ベートーヴェンは「シェイクスピアを読め、テンペストだ」と答える。『テンペスト』はミラノの前大公が、罪に陥らされて島流しに遭う漂泊、漂流の物語です。ここからロマン派の漂流が始まったと考えられています。人間の彷徨、あるいは魂の旅。人間が自らの魂を求め、自由を求め、人間と自然を結びつける世界

模型を求めて、さまよい始める。近代人とは故郷喪失者ではないか。魂を求めて、人間と自然の分断されたその乖離を再び融和させる、新しい「庭」という形式、媒介者を求めていく姿です。



魂の喪失を抱える現代人、モダニズムに潜む合金性

「庭」は二十世紀になって「アート&デザイン」という実在になってくるわけです。自然を人間のなかにいかに取り込むかという世界解釈、世界を鑑賞するシステムとしての世界モデルとして、庭はアートとして変貌した。庭というのは、造形であることを超えて、思想であり記憶であり、憧憬そのものなんですよ。

故郷喪失した人、自らの風土とか伝統も失った人がそれらをどうやって探し、発見していくかという時に出てくるのが、「モダニズム」というスタイルなのじゃないか。二十世紀の前半を支配した壮大なる潮流です。

アメリカで、1940 年代に抽象表現主義が台頭してきます。壮大な画面を使ったマーク・ロスコ、真っ赤な画面が三メートル位続いて、その真ん中や端っこに白い線を入れたバーネット・ニューマン。ドラマティックな人間精神の緊張と広大なる宇宙の対峙ですね。人間はアメリカ大陸のグランドキャニオンみたいな、制御し得ない自然に対峙したときに、ニューヨークのスカイスクレーパー(摩天

楼)の都市と、鉄鋼と石油による自動車産業とを作っていった。自然に対して、壮大なる構築物としての人工を持ってきた。

芸術家たちはそこに自分たちの新しい庭としてのアートを作っていく。バーネット・ニューマンでもクリフォード・スティルでもマーク・ロスコでも、たいへんドラマティックで、シャープで自己求心的な還元的な、色も形も限定して、徹底的に造形を突き詰めてミニマルにしていく。スケールとしては壮大だけども、ある種のミニマルな庭を作っていった。それがニューヨークの近代美術館に典型的に見られる芸術のスタイル、抽象表現主義というモダニズムの志向だと思います。

ロスコはロシアの移民家系です。それからモダニズムの一番先で頑張ったが結局自殺する、ノグチさんと親しかったアーシル・ゴーキー、彼はアルメニアからの移民です。ほとんどの人はユダヤ人だった。ロシアや東欧から来て、ヨーロッパ、ラテン、アングロ・サクソン、ゲルマンなどの西ヨーロッパ中心文化から少々抜け落ちたような東側の人々。世界観がアメリカ新天地でぶつかり合う。

モダニズムの実体は美術史や芸術史のなかで解釈されているようなピュアでミニマルなものではない。じつはモダニズムとはそれに隠されたアマルガム、つまり異文化フュージョン、つまり合金の影なんである、と。故郷や伝統の喪失者である彼らが、新しい故郷を求めて、いろんなところを徘徊しながら、アメリカへやってきた。そこで、バラバラになった風土とか伝統をなんとかしてパズルのように組み合わせて、自分たちの新しい世界観を作ろうと考えた。それらはいわば、アメリカの清新な風土や伝統なき伝統と混ざりあって生み出された偶然的合金である、と。風土の複合化であり、新しい共同性や共同化に対する憧れでもあったのではないか、と考えるんですよ。

今まで僕らはモダニズムのピュアなところばかりを見ていた。これからは逆に、モダニズムの雑種性や合金性をこそ見ながら、そこに「ああ、やっぱり十九世紀からのロマン主義を抱えていた人たちと同じく、魂の喪失者として二十世紀の僕らもある」という視点から、いろいろなものを見直していきたい。さきほどのラフマニノブの音楽のなかにも、そういうものを感じるわけですね。

1933 年の徹底研究、魅力ある「庭」の作家の姿

今回お話ししたい 1933 年という年は、昭和八年。日本では前年に満州国の建国、ついで国際連盟の脱退。日中戦争が泥沼化し、太平洋戦争に突入していきます。

ヨーロッパでは、ナチスが政権をとって他国に侵攻する。ユダヤ人の弾圧が始まると敏感な人たち、とくに芸術家たちはどんどんアメリカに逃げていく。1929 年に始まった世界恐慌に翻弄されながら、新しいインフラが整った時期でもある。1925 年のパリ万博から生まれたアール・デコがヨーロッパやアメリカを席巻する。ファシズムが始まり、第二次大戦の予兆が響く。第一次大戦後のインフラが整って、政治経済が成熟を迎える。非常に微妙な時代ですね。アメリカは恐慌前の経済の繁栄を謳歌していた。産業消費主義の広がり、ストリームラインなど、消費を煽るようなデザインが台頭した時代でもあります。

日本では大衆文化が整った時代です。都市には農村や漁村から人が集中し始めて、中産階級というサラリーマン層が出現する。国民作家として登場したのが林芙美子です。川端康成、永井荷風ら後の大巨匠も登場する。林芙美子についで尾崎翠が 30 年に女性作家として登場する。

林芙美子がこの時代に書いたのが『放浪記』です。各地を転々として「私は故郷を持たない、宿命的に放浪者である」というモダニズムの放浪を描いて、国民的大作家になっていく。大ヒットした彼女の作品は、「今日何を食べた、豚カツの匂いがした、いやー、肉のずるずるしたこの感覚がたまらない」っていう、自分の肉体、五感そのものの謳歌です。林芙美子は肉体と日本の風土という庭を、そうした喪失した故郷、五感のユートピアを求めてさまよう。

尾崎翠さんは、鳥取から出てこられて、ほとんどそれ一冊しか残してない『第七官界彷徨』を書いた。苔の恋愛の研究をする兄の実験を地方から出てきた妹が手伝う。家のなかは苔で一杯、肥やしの匂いに満ちているという奇妙奇天烈、抱腹絶倒な小説で、五感でも第六感でもない人間の第七感の世界を彷徨するという。まったく新しい「感覚の庭」の小説と言ってもいい。日本の近代のシュール小説の最高峰と思います。

また近代で詩や小説を書いて、たいへんな映像喚起力があった人が宮沢賢治です。1933 年は賢治が亡くなった年でもある。最後は高等農林の先生でしたが、「こんなことやっていてもしょうがない、俺は百姓になる」と、分限者の息子なのに百姓のマネをして生きる。彼は農民芸術運動を「自分たちは地人なんだ、地の人だ。羅須地人協会を俺はつくる。裏の畑にいますが、暇があったらここに来て、僕のチェロと一緒に踊りませんか」と始めた。当時の周りにいたお百姓さんは彼がいったい何をしたいかなど、わからなかったみたいですね。

でも、そういうものがいろいろな形で彼の童話に生きている。環境問題を考える、生きていくそのもの悲しみを書く、生命現象に彼なりの非常にファンタジックな夢を託していくこと。すべて生命の、精神の、理想の庭を求めるような活動です。日本で天才を一人挙げうと言われれば、僕にとっては宮沢賢治以外あり得ない、そういう人がこの年に亡くなった。

なぜ、1933 年なのか。それはもともと他愛なく、1958 年が自分の生まれ年で、まずその年を知りたかった。父親や母親の青春時代をですが、その二十五年前ということで、さらに祖父母の青春時代である 33 年をやり始めた。これはじつは歴史研究で有名になった戦後の一派、フランスのアナール学派の方法に依ったもの。その一年に何があったかを徹底的に調べる。歴史に残る国家的、行政的な事象ではなく、民衆史を徹底的に調べて書いた一派です。僕らの大学の頃すごく流行して、慶応の仏文で受けた一番面白かった授業もこれに絡む。自分のゼミでこれをぜひやろうと、ゼミ生と一緒に長年やっています。そういうなかで見えてきたものが、たいへんいろいろな発見があって、実り多く面白いのです。

(ラフマニノフを語る折田真樹さん、ベートーヴェンの大木正純さん、十八世紀論では亡き辻邦生さん。宮澤賢治の鶴田静さん、堀尾青史さん、林芙美子の川本三郎さん、近代小説研究の柄谷行人さん、昭和史研究の山口昌男さん、などそれぞれ先学の論考から多くを学んで、借りている。さらに、義塾仏文の恩師、立仙順朗先生、鷲見洋一先生に深謝。)

Roland

新見 隆 (にいみ りゅう)
1958年広島県生まれ。慶応義塾大学文学部フランス文学科卒業。1982年から1999年2月まで、西武美術館・セゾン美術館の学芸員として、展覧会の企画を担当。1999年武蔵野美術大学芸術文化学科教授となる。フリーランス・キュレーター。ミュージアム＆アート・コンサルタント。二期リゾート文化顧問。